

「ゆうだい21」の特性と栽培法

平成22年11月9日改訂
宇都宮大学農学部附属農場

種子消毒

販売する種子籾については、未消毒です。ばか苗病やシンガレセンチュウ等の発生を防止するため、種子消毒を徹底してください。

特性 (栽培地：栃木県真岡市)

出穂はコシヒカリより2、3日遅い早生種で、5月上・中旬の移植で8月10日前後の出穂となる。最大草丈はコシヒカリに比べ10～20cm程度高く、稈長は5～10cm、穂長は3～5cm程度長い。分けつ性はコシヒカリと同様の中間型であり、最高茎数は同程度、有効茎歩合がやや低く、穂数がやや少なくなる傾向がある。穂長約25cm、1穂籾数は130～150程度と非常に巨大な穂を付ける特徴がある。玄米千粒重は22gでコシヒカリと同程度。耐倒伏性は稈が太く、耐倒伏性はコシヒカリよりやや強である。

しかし、長稈であり、多肥にすると強くなびき、受光態勢が悪化し登熟歩合が低下する。玄米品質はコシヒカリと同程度、食味は粘りがあり、また甘みと硬さも適度でコシヒカリより明らかに良い。耐病性に関して、いもち病は葉いもち、穂いもちともコシヒカリよりはやや強い中程度である。その他病害虫については発生経験がなく、今後の検討課題である。

栽培方法

現在コシヒカリの栽培が行われている地域に適応し、播種期、移植期とも同じでよい。稚苗育苗で播種量乾籾100～120g／1箱、18～20箱／10a、育苗期間20～25日程度。種子の休眠がやや深い傾向がみられるので、種子予措時の浸種期間は長めにとると、出芽揃いがよくなる。栽培法は肥培管理等コシヒカリと同様でよいが、栽植密度は18～20株／㎡、1株3本植とやや疎植が良く、肥料は同程度かやや少なめで、コシヒカリ並かやや多収になる。多肥では、倒伏はしないが登熟歩合が低下し、多収にならない場合が多い。減化学肥料、減農薬栽培等の特別栽培に適応性が高く、いもち病無防除でも穂いもち病の発生は少ない。水管理は慣行でよいが、コシヒカリのように強く中干しをする必要はなく、間断灌漑程度でよい。